

実験報告の修辞学

— 19世紀後半の心霊研究と「裁判のレトリック」 —

松村一志

1. 問題関心

近年、研究不正が大きな話題となっている。そこでは、同僚科学者の報告しているデータが意図的な嘘を含んでいる可能性に対し、科学者共同体がどう対処すべきかが問われている。しかし、こうした問題は、現代になって初めて現れてきたものではない。むしろ、実験報告の信頼性は、19世紀以前の科学でも、しばしば問題化されてきた。そこで本稿は、科学社会学・科学史的な事例分析から、実験報告をめぐる規範の過去と現在について考察したい。

さて、実験科学というジャンルは、17世紀イギリスのロンドン王立協会やフランスの科学アカデミーといった組織において、初めて全面的に開花したものである。しかし、そこでの学者間関係は、現在のそれとは大きく異なっていた。以下で確認するように、当時の学術共同体では、実験報告が嘘を含む可能性が、現在よりも遥かに強く意識されていたのである。

科学知識の社会学 (Sociology of Scientific Knowledge) の歴史研究によれば、17世紀の実験科学では、次のような問題が認識されていた。すなわち、実験者の個人的経験にすぎない実験結果を、学術共同体が共有する公共的知識に変換するにはどうすれば良いのかという問題である (Shapin[1996=1998:137-140])。実験者は、ミスを犯したり、嘘をついたりする可能性がある。見ず知らずの実験者については、なおさら、そうした可能性が疑われてもおかしくない。加えて、中世からルネサンスにかけての自然哲

学・自然史では、権威ある古典的文献の記述が正しいものと見なされていた (Hacking[1975→2006=2013:54])。そのため、文献の記述を実験によって覆することができるという現在では自明とも言える発想が未だ市民権を得ておらず、個人的経験を公共的知識に変換するための特別な工夫が要請されていた。

そうした工夫の一つが、「裁判のレトリック the rhetoric of trial」 (Licoppe[1994:206]) と呼ばれる隠喩系の使用である。現在の感覚からすれば奇妙なことだが、17世紀イギリスのロンドン王立協会では、ロバート・ボイル (英: 1627-1691) のような王立協会のメンバーが、実験報告に法廷での論証戦略を採用していたことが知られている。そこでは、実験が公開の場で実演され、裁判の手続きに倣って、多くの信頼できる人物 (= 複数の紳士) が集められた。そして、それらの見物人が「証人 testimony」や「目撃者 witness」に見立てられ、実験報告には「A氏が見た」といった情報が記載されたのである (Shapin and Schaffer[1985→2011=2016:79-82])。イギリスほど明示的に裁判用語が使われたわけではないにせよ、同時期のフランスの科学アカデミーでも、実験報告には「誰某が実験した」とか「誰某が見た」というような裁判風の物語形式が採用されていた (Licoppe[1994:206-207])。このように、「裁判のレトリック」を使うことで、実験報告が含む間違いや嘘の問題を、実験者や目撃者の適格性の問題として処理することができたのである。

本稿もまた「裁判のレトリック」について分析しようと考えている。ただし、ここでの関心は、従来の研究⁽¹⁾のそれとは異なっている。従来の研究は、17世紀という実験科学の黎明期において「裁判のレトリック」が導入された経緯を論じてきた。それは、科学革命や初期近代の解明という目的に支えられている。これに対し、本稿はむしろ「裁判のレトリック」がどう消えたのかを考えたい。現在の科学において「裁判のレトリック」が使われることはほとんどないと言って良いだろう。逆に、いまでも「裁判のレトリック」が使われているのは、もっぱら「疑似科学」と呼ばれる領域に限られているように見える。そこでは、代替医療の効果に関する「証言」やUFOの「目撃情報」が盛んに語られている。だとするならば、「裁判のレトリック」は過去から現在までのどこかの時点で、科学から排除されてしまったのだと考えることができる。したがって、本稿は、「裁判のレトリック」をその消失（ないし失効）という観点から分析することにより、現在の科学が抱える暗黙の前提に光を当ててみたい。

無論、「裁判のレトリック」の盛衰を網羅的に検討することは、本稿の射程を大きく超えている。そこで本稿は、19世紀後半の心霊研究（psychical research）という一領域を参照点として、この問題に接近したいと考えている。心霊研究と言うと、単なるオカルトや疑似科学⁽²⁾だと思われるかもしれないが、後述するように、19世紀の欧米の科学において、それはオカルトや疑似科学だと切り捨てるには大きすぎる影響力を持っていた。事実、近年では、心霊研究をオカルトや疑似科学として処理するのではなく、より広い科学史や文化史の文脈に位置づける新たな研究群が現れつつある⁽³⁾。それらは、科学と非科学についての現在の理解を予め持ち込んでしまうような多くの研究者の態度を問題視している（Luckhurst[2002:1-3], Sommer[2014]）。

では、心霊研究がとりわけ本稿にとって意味を持つのはなぜなのか。議論を先取りすれば、それは、心霊研究において「裁判のレトリック」が多用されていたためである。しかも、ここでは「裁判のレトリック」の有効性をめぐる議論が、科学と非科学の境界を区画する係争点にもなっていた。その意味で、心霊研究という事例は「裁判のレトリック」の消失という事態を考えるための重要な観測地点の一つだと言える。このような観点から、本稿は、心霊研究において「裁判のレトリック」がなぜ使用され、いかにして失効したのかを問いたい。そのことは、現在の科学における「裁判のレトリック」の不在が何を意味するのかを明らかにすることにもつながる。

以下では、まず、18世紀における実験の見世物性に光を当てた科学史・美術史の知見を整理し、その性格が心霊研究にも継承されていることを確認する（→Ⅱ）。次に、心霊研究における初期の実験を取り上げ、そこで「裁判のレトリック」がどう機能していたのかを分析する（→Ⅲ）。その上で、「裁判のレトリック」がその有効性をどのように失ったのかを二つの側面から検討する（→Ⅳ）。最後に、心霊研究の事例を踏まえて、現在の科学を反省的に捉える。特に、現在では自明視される「再現可能性」という発想を、歴史の中に位置づけることが目指される（→Ⅴ）。

Ⅱ. 対象とその前史

Ⅱ.1. 見世物としての実験

本稿の対象について説明する前に、前史にあたる18世紀の実験をめぐる環境についても言及しておきたい。ここでは、二つの側面に触れておこう。第一に、電気・磁気への注目がある。18世紀後半以降、静電気を貯めるライデン瓶やルイジ・ガルヴァーニ（伊: 1737-1798）による動物電気など、電気や磁気に関する発見が相次

いだ。その結果、目に見えない力に対する注目が高まっていたのである。第二に、見世物としての実験の広がりがある。18世紀の西欧では、興行的な実験家による大衆向けの実験が広く普及していく。そうした中で、電気や磁気を使った実験ショーや、現在の催眠術に当たる動物磁気（メスメリズム）のショーや治療が人気を博していた（Darnton[1968=1987:第1章]）。では、この間、実験はいかなる変容を経験したのか？

サイモン・シャッフアーによれば、18世紀の西欧では実験装置が普及するとともに、実験装置の適切な運用が問題になっていた。実験装置の運用の仕方が人によって違ってしまうと、そこで得られる結果も変わってしまう。とりわけ、電気や磁気を扱う場合には、身体の微細な動きが、予期せぬ形で結果に影響を与える可能性がある。そこで、実験の「非身体化 disembodiment」とも呼ぶべき事態が進行したという。すなわち、実験者の身体の配置を測定したり、実験者の振舞いを制御したりする動きが現れたのである。19世紀にはさらに、自動記録装置（ex. グラフ・写真）が導入され、実験者の身体の消去を可能にした（Schaffer[1992]）。

バーバラ・スタフォードは、シャッフアーの議論を引き継ぎつつも、18世紀における実験と見世物の連続性を強調する。それによると、興行的な実験家によって担われていた大衆向けの実験は、一種の視覚的な娯楽と化しており、奇術やジャグリングのような見世物と連続的なものだと見なされていた。そのため、実験者の手さばきにより、目撃者が欺かれているかもしれないという疑念さえ持たれていた。つまり、18世紀の実験においては「知覚の欺かれやすさ」が強烈に意識されていたという（Stafford[1994=1997:第3章, 369]）。

実験があくまでも目撃されるものである以上、そこには「知覚の欺かれやすさ」が付いてまわる。実験者の振舞いの測定・制御・消去といっ

た操作は、そのことに対する予防策になっていたと言えるだろう。ところが、19世紀後半になると、「知覚の欺かれやすさ」に対する予防策を無効にするような領域が出現する。それが、心霊研究である。

II.2. 心霊主義の大流行

本稿が対象とする心霊研究は、近代心霊主義（modern spiritualism）と呼ばれる19世紀後半の思想的運動の一部だが、それはさらに当時の時代状況と深く関わっていた。

18世紀末から19世紀にかけての欧米では、実証主義・自然主義・科学主義といった考え方が大きな影響力を持ち始めたが、それは同時に多数の「疑似科学」を生んだ時代でもあった。例えば、骨格や顔つきから性格を読み解く骨相学・観相学や、病気を起こす原因となる物質を使って病気を治そうとするホメオパシー、動物に磁気の流れがあると考えた動物磁気説のような「疑似科学」が大流行したのである（Knight[2009:chapter7]）。

ただし、「疑似科学」といっても現在のそれとは位置価値が異なっていた。そもそも、「科学」とは似て非なるものとしての「疑似科学 pseudoscience」という英語自体、18世紀末に登場している⁽⁴⁾。18世紀末から19世紀前半にかけての西欧は、「自然哲学」や「自然史」といった従来の学問類型が再編され、現在にも続く「科学」のイメージが形成され始めた時期であった（Cunningham and Williams[1993]）。その意味で、19世紀には、「科学」と「疑似科学」の境界は今よりも遥かに曖昧だったのである。

では、近代心霊主義はこうした動きとどう関係しているのか。心霊主義と聞くと「疑似科学」でさえなく、「科学」とは似ても似つかない単なる「オカルト」だと思われるかもしれない。確かに、イタコのような伝統的な心霊現象は「科学」とは無縁だろう。しかし、19世紀後

半に登場した近代心霊主義に関する限り、少なくとも二つの意味で、「科学」と接点を持っていた。

一つは、現象の新しさである。近代心霊主義の起源として繰り返し言及されるのは、アメリカで発生したハイズヴィル事件（1848）と呼ばれるポルターガイスト現象だが、この事件以降、降霊会と呼ばれる形式が欧米社会へと一斉に広がった。一般にそれは、職業的ないし非職業的な霊媒師が降霊会を開き、そこに呼び出された霊が、ポルターガイスト現象・自動筆記・心霊写真・テレパシー・透視といった様々な現象を引き起こすものである。心霊写真やテレパシーを考えればわかるように、それらはモールス信号・テレグラフ・写真といった最先端の科学技術をトレースしたものであり、そこに新しさがあった。

そしてもう一つが、科学的研究の存在である。以上のような新しい心霊現象は、潜在意識や電磁波といった当時の心理学・生理学・物理学で注目されていた対象とよく似ており、著名な心理学者・生理学者・物理学者による研究を生んだ。つまり、心霊現象は、様々な学問領域からの関心を集めるハイブリッドな研究対象だったのである（Luckhurst[2002:2]）。

本稿で「心霊研究」と呼んできたのは、このような科学的研究のことである。ただし、当然そこには、通常の科学とは異なる困難が含まれていた。心霊研究にもいくつかの研究方法があるが、実験が行われたのは降霊会という見世物性を多分に備えた場所においてであった。そこには、被験者である霊媒師がトリックを使っている可能性が付きまとい、催眠術などによって観察者が現象を錯覚しているという疑念も持たれた。そのため、観察の信頼性という問題にどう対処するかが、重要な課題となったのである。

次節以降では、初期心霊研究における実験報告を参照点として、この問題がどのように対処

されたのかを確認していく。なお、心霊研究の中でも最も科学性を重視したことで知られるのは、1882年にロンドンで設立された心霊現象研究協会（Society for Psychical Research）であり、本稿の事例もイギリスが中心となる。ただし、心霊現象研究協会は、国境を超えて著名な科学者が参加する国際的な組織であったため、本稿ではその繋がりも重視することになる⁽⁵⁾（McCorristine[2010:103-104]）。

III. 十九世紀の線引き問題

心霊研究が本格的に組織化されたのは、心霊現象研究協会が設立された1880年代以降のことだが、それ以前から科学者による心霊現象の調査がなかったわけではない。初めて意識的に科学的方法を用いたのは、物理学者ウィリアム・クルックス（英: 1832-1919）であった（Palfreman[1979:210]）。クルックスの実験には、それ以後の心霊研究にも繰り返し現れる特徴が既に先取りされている。そこで本節では、クルックスの実験報告を取り上げよう⁽⁶⁾。

クルックスは、タリウムの発見やクルックス管の発明により現在でも知られており、1863年には王立協会のフェローに選出され、コプリ・メダル等も受賞している。そうした人物が心霊研究に関心を持ったのは、科学的な実験がなされていないという問題意識ゆえである。クルックスは、*Quarterly Journal of Science*誌の1870年7月号において、初めて心霊研究への関心を表明している（Crookes[1870]）。さらに一年後の1871年7月号には、当時最も有名だった霊媒師ダニエル・D・ホーム（英: 1833-1886）を招いて行なった実験を投稿した。この雑誌は、クルックス自身が編集していたものではあるが、普通の自然科学を扱う雑誌であったため、実験の条件にはかなり注意を払っている。

ホームに対しては二種類の実験が行われた。第一の実験は、霊媒師が片手しか触れていない

のにアコーディオンが鳴るという見世物性の高いものであった。これに対し、第二の実験は、より物理学的なものである。すなわち、木製の板の片方の端をテーブルで支え、もう片方の端をバネばかりで吊り上げた状態にし、テーブルで支えている方の端に霊媒師が指を置くと、バネばかりの目盛りが増加するというものである。霊媒師が指を置いた場所は、支点を挟んでバネばかりと反対にあるため、そこに力を加えてもバネばかりの側が重くなるはずはなく、また霊媒師が指に力を入れていないことを確認するために、指の下にマッチ箱（力を入れると潰れる）やベル（押すと音が鳴る）を置いても結果は同じであった。そこでクルックスは、霊媒師が見えない力を発していると考え、それを心霊力（psychic force）と名付けたのである（Crookes [1871a:344-346]）。

本稿にとって重要なのは、クルックスの実験報告が「裁判のレトリック」を使用していたことである。そこでは、大きく分けて四つの記述戦略が採用されていた。

第一に、証人の列挙がある。クルックスは、自分以外に実験を目撃した人物について、「王立協会が高い地位にある物理学者」のウィリアム・ハギンズ（英: 1824-1910）、「名の知れた上級法廷弁護士」のエドワード・ウィリアム・コックス（英: 1809-1879）、クルックスの兄弟、クルックスの化学助手であると明記している⁽⁷⁾（Crookes [1871a:341]）。注目すべきことは、クルックスが証人の評判と専門とに触れていることである。

第二に、証言の複数化がある。実験報告自体はクルックスが一人で書いたものだが、随所に「ハギンズが目盛りを見ながら『6.5ポンドになった』と言った」というような記述が見られる（Crookes [1871a:344]）。誰が見たことなのかを意識的に書き込まれることで、実験報告がその場に居合わせた目撃証言の合成だということが

明示される。

第三に、証人の宣誓が見られる。すなわち、実験報告の末尾に、ハギンズとコックスからの書簡が引用されているのである。ハギンズは「あなたの証言は、あなたの家において私の目の前で起こった出来事についての正確な陳述を含んでいます」と述べ、コックスもまた「私は進んであなたの記述が正確であることを証言します」と記している（Crookes[1871a:348]、傍点は引用者による）。これにより、クルックスの報告自体の信頼性が根拠づけられる。

第四に、証人としての資格への言及がある。実験の前年の文章において、クルックスは「科学的訓練scientific training」の重要性を語っている。長期の科学的教育を受けた科学人（scientific men）は、普通の観察者と違って、実験の「正確性」を確保することにより、詐欺行為を排除できるというのである（Crookes [1870:317-9, 321]）。クルックスは自分のことをそのような科学者だと考えていたし、ハギンズについても「科学界の多数を代表している」と評価している（Crookes[1871a:346]）。それゆえ、クルックスは、実験結果が「決定的なテストの適用、注意深く配置された装置、申し分のない証人の立会い」（Crookes [1871a:347]、傍点は引用者による）の下で得られたものだと断言している。

ただし、このような記述戦略が功を奏したとは言い難い。クルックス自身が述べるように、こうした実験を追試しようという機運はなかったし、王立協会の書記である2人の教授を新たな実験に招待したが、断られてしまった（Crookes [1871b:478]）。しかし、だからといって「証人」という発想自体が否定されていたとも言えない。なぜなら、クルックスに対する批判者もまた「裁判のレトリック」を使用していたからである。

心理学史に名を残している生理学者ウィリア

ム・カーペンター（英: 1813-1885）は、*Quarterly Review*誌の10月号に掲載された「心霊主義とその最近の転向者」（1871）において、クルックスの論文に対する批判を展開した。カーペンターは、心霊現象が霊媒師や実験参加者の「無意識の筋肉運動」（Carpenter [1871:308]）によるものだという見解を示した上で、コックス、ハギンズ、クルックスが「科学的訓練」を欠いており、「申し分ない証人」とは言えないとまで主張する（Carpenter [1871:340-343]）。

ジョン・パルフレマンが正しく指摘しているように、両者の対立の背景には、科学の専門職化という制度的変化がある（Palfreman [1979:216]）。この時期のイギリスでは、カーペンターのように、大学で博士号を取得し、教授職に就いて職業科学者となるキャリアが生まれたが、同時に、ハギンズのように収入のある人物がアマチュア科学者となるケースもあった。クルックスはこの中間で、王立化学大学という単科大学を卒業後、自宅に実験室を設け、浄水処理・下水処理・電灯等の特許技術を開発する一種の企業家として生計を立てていた（Luckhurst [2002:24-25]）。そのため、カーペンターにとって、クルックスやハギンズのような在野の科学者は、たとえ学界において評価されているとしても、アマチュアに見えたのである。

とはいえ、重要なことは、カーペンターが「信頼できる目撃者trustworthy witness」（Carpenter [1871:316]）といった表現を用いていたことである。つまり、批判もまた「裁判のレトリック」の内部でなされていた。そこでは、「裁判のレトリック」の使用により、観察の信頼性という問題が、「証人」の適格性の問題へと変換されていたのである。ところが、さらに時代が下ると、心霊研究においてさえ、「裁判のレトリック」は内面的にも外的にもその有効性を失うことになる。次節では、そのことを

二つの側面から順に見ていきたい。

IV. 「裁判のレトリック」の破綻と忘却

IV.1. 証言の心理学

心霊研究における「裁判のレトリック」の使用は、クルックスに限ったことではない。むしろ、心霊研究一般の特徴だと見ることができる。例えば、進化論で知られる博物学者アルフレッド・ラッセル・ウォレス（英: 1823-1913）は、『奇跡と近代心霊主義*Miracles and Modern Spiritualism*』（1874）に、心霊現象の証人の名前と職業のリストを掲載し、証人たちが「誠実honest⁽⁸⁾」であることを強調している（Wallace [1874→1896:35-36]）。また、心霊現象研究協会の初代会長となった哲学者ヘンリー・シジウィック（英: 1838-1900）は、その会長講演において、心霊研究が既に多数の「証言」を集めていると指摘した上で、それらの「証言」が質の上でも高い水準にあると主張している（Sidgwick [1884:153-155]）。

ただし、誰が「証人」にふさわしいかは未決の問題であった。例えば、ウォレスは先述のカーペンターによる心霊研究批判を半ば皮肉りながら、「訓練された専門家（trained experts）とは誰のことか？」（Wallace[1877:393]）と疑義を呈している。「訓練された専門家」が医学博士を意味するのであれば、心霊現象を擁護する陣営にも「訓練された専門家」は存在していると言える。そのため、ウォレスにはカーペンターの基準がアド・ホックに見えたのである。

とはいえ、少なくとも、霊媒師の詐欺行為に騙されないことが重要な条件の一つであったことは間違いない。そのことは、心霊研究の実験にしばしば奇術師が招待されたことにも表れている。例えば、ジョン・ネヴィル・マスケリン（英: 1839-1917）やハリリー・フーディーニ（米: 1874-1926）といった一流の奇術師がトリック

を見抜けるかどうか、心霊現象の真正性を確かめる一つの基準となっていた。この背景には、19世紀という時期に、魔術的な装いを脱色した「近代奇術」が確立され、奇術師と霊媒師が対立的な存在になっていたという事情もある (Palfreman[1979:206], Oppenheim[1985=1992:45-49])。

ところが、1880年代末になると、それまでは漠然としていた観察の信頼性の問題を心理学的に解明する論文が登場する。それは、『心霊現象研究協会紀要*Proceedings of the Society for Psychical Research*』第4号(1887)に発表された、法学者リチャード・ホジソン(英: 1855-1905)とアマチュア奇術師S. J. デイヴィー(英: 1863[?]-1890)の「実践的観点から見た不当観察と記憶違いの可能性」である。これは、同号に掲載された法律家チャールズ・カールトン・マッシー(英: 1838-1905)の「心霊現象の証拠に関する不当観察の可能性」への批判を主眼とするものである。

マッシーによると、観察を細かい要素に分解することができれば、実際に何が行われていたのかをチェックすることができるため、霊媒師がトリックを使っているかどうかを見抜くことができる。そのためには、司法手続きに見られる「反対尋問cross-examination」が有効である。というのも、それは「一つの一般的陳述を、それが本当は含んでいる複数の個別的な陳述へと還元する」(Massey[1887:89])ものだからである。

これに対し、ホジソンとデイヴィーは、次のような実験を行った。まず、デイヴィーが霊媒師の名を語って降霊会を開き、奇術を使って、小さな黒板に文字が現れるという念写現象を見せる。次に、参加者に降霊会の記録を書かせる。そして最後に、参加者の書いた記録を、実際に行われた手順と比較するのである。この実験から二人が発見したのは、参加者がトリックに全

く気づいていない上、実験の手順自体をも間違っていて記録していたということである。つまり、降霊会においては、知覚が欺かれるのみならず、記憶まで誤って修正されていたのである (Hodgson and Davey[1887:388-389])。

それゆえ、ホジソンは、心霊研究に対する「裁判のレトリック」の適用に疑いの目を向けざるを得ない。「他の事情が同じならば、同一の出来事に対する二人の目撃者の証言は、一人の証言よりも優れていると見なされて当然である。それでもやはり、我々は、この原理を「念写」現象についての証言に適用することには注意しなければならない」(Hodgson and Davey[1887:399])。

この実験が心霊研究者に与えた影響は、心霊現象研究協会の会長となった心理学者ウィリアム・ジェームズ(米: 1842-1910)の「心霊研究の成し遂げたこと」(1897)を見るとよくわかる。ジェームズは、心霊現象研究協会が「反対尋問」などの手法を使うことで「証言」の質を担保していることを強調しているが (James[1897→1960:30])、それと同時に先の実験にも言及している。「このデイヴィー=ホジソン実験は、おそらく目撃証言に関してなされた中でも最も破壊的な記録だろう」(James[1897→1960:36-37]、傍点は引用者による)。

ただし、注意すべきことは、ホジソンとデイヴィーの論文が、心霊研究の中でのみ流通するものではなかったことである。例えば、心理学者ギュスターヴ・ル・ボン(仏: 1841-1931)は『群衆心理*Psychologie des Foules*』(1895)において、降霊会に関するホジソンとデイヴィーの実験を「集団的錯覚」の例として取り上げている (Le Bon[1895:31-32=1993:51-52])。ウサギとアヒルの騙し絵で知られる心理学者ジョセフ・ジャストロウ(米: 1863-1944)もまた、『哲学・心理学辞典*Dictionary of Philosophy and Psychology*』(1901)の「記憶(障害)

Memory (defects of)」という項目において、「不当観察mal-observation」の研究における「記憶違いerrors of memory」の分類に触れるとともに、ホジソンとデイヴィーの論文を参考文献リストに挙げている（Jastrow[1901→1925:65-66]）。

このことは、奇術や心霊現象が、幻覚や記憶違いといった逸脱的現象を心理学的に分析するための興味深い素材となっており、心霊研究が——論争を呼ぶものではあるものの——未だディシプリンとしての確立の途上にあった心理学の一領域として認識されていたことを示している。

しかし、それだけではない。さらに重要なのは、ホジソンとデイヴィーが「証言の心理学」という知の成立を半歩先取りしていたことである。1890年代から1910年頃にかけて、法廷での「証言」を対象にした応用心理学が登場し、心理学と法学の協働や対立が生じていた。例えば、ドイツでは刑法学者フランツ・フォン・リスト（独: 1851-1919）が心理学者ウィリアム・シュテルン（独: 1871-1938）と共同研究を行う一方、アメリカでは心理学者ヒューゴ・ミュンスターバーグ（独→米: 1863-1916）と法学者ヘンリー・ウィグモア（米: 1863-1943）が証拠法の妥当性をめぐって論争を繰り広げた（篠木[2016:24]）。先述の『群衆心理』もこの文脈に位置づけることができるだろう。ル・ボンは、ホジソンとデイヴィーの実験に触れたのち、法廷での「証言」の評価法に対する批判を展開している（Le Bon[1895:34-35=1952→1993:54-56]）。

「証言の心理学」の出現は、心理学による知覚や記憶の分析が、証拠法の手続き自体に再考を迫る可能性を内包していたことを物語っている。心霊研究では、この可能性がかなり早い段階で試されていたのである。

IV.2. 蓋然性の確率化

世紀転換期の心霊研究においては、以上のような形で「裁判のレトリック」が内在的に破綻を宣告されていた。もちろん、破綻が指摘された後も「裁判のレトリック」が使用されなくなったわけではないが、「裁判のレトリック」それ自体が、科学的方法とは無縁であるように見え始めたことは間違いない。しかし、これと並行して、もう一つの変化が生じていた。それは、確率論・統計学という知の導入である。本稿の範囲では、心霊研究における確率論・統計学の系譜にまで深く立ち入ることはできないが、少なくとも確率論・統計学の導入が持つ意味については触れておかなければならない。

イアン・ハッキングは、統計学における無作為化（randomization）の前史を心霊研究のテレパシー実験に見ている。それによると、確率論・統計学を心霊研究に初めて持ち込んだのは、パリの生理学者シャルル・ロベール・リシェ（仏: 1850-1935）であった。リシェは、次のようにしてテレパシーの実験を行なった。まず、被験者の一人にトランプから一枚のカードを引かせ、そのカードを念じさせる。次に、もう一人の被験者にトランプのマークを推測させ、後者の推測が前者のカードに一致するという事象の確率が有意に高いかを検討するのである（Hacking[1988:438-439]）。結果は芳しくなかったが、これがきっかけとなり、テレパシー研究は統計学者の協力を要請するようになる。1920年代には、推測統計学を体系化した統計学者ロナルド・エイルマー・フィッシャー（英: 1890-1962）も『心霊現象研究協会紀要』に三つの文章を寄稿し、カード当てのスコアリング手法を案出している（Hacking[1988:449-451]）。

さらに1930年代になると、超心理学（Parapsychology）が成立する。それは、カード当ての能力を「超感覚的知覚Extrasensory Perception」と解釈することで、理論から霊的ニュアンスを消去し、方法面では実験的・統計

的手法に特化させたものである。創始者であるデューク大学のジョセフ・バンクス・ライン(米: 1895-1980)が有意な結果を出したために、超心理学は心霊研究に代わってこの分野の主流になった(三浦[2008:224-234])。こうして、心霊研究においては、「裁判のレトリック」から確率論・統計学への交代が決定的なものとなる。

ただし、確率論・統計学の導入は、単なる新しい手法の導入を意味するだけではない。それは同時に、probabilityという言葉の意味内容の変化をも伴うものである。そもそもprobabilityという言葉は、日本語において「確率」と「蓋然性」とに訳し分けられる。「蓋然性」は「確からしさ」一般を意味するが、それが定量的に把握されるとき、初めて「確率」という考え方が出現する。つまり、確率論・統計学の導入は「蓋然性の確率化」を前提しているのである。裏を返せば、確率論・統計学が導入されていない領域において、probabilityはあくまでも「定量／非定量」が未分化であるような全き「蓋然性」として立ち現れる⁹⁾。

このことは、心霊研究にとっても重要な意味を持っている。なぜなら、そこでは「蓋然性」が理論上の争点の一つだったからである。シェイン・マクコリスティンが指摘するように、心霊研究を巡っては、デイヴィッド・ヒューム(英: 1771-1776)の『人間知性研究*An Enquiry Concerning Human Understanding*』(1748)の第10章「奇蹟について*Of Miracles*」がしばしば問題となった(McCorristine[2010:129-131])。

議論の的となったのは、次のようなヒュームの議論である。奇蹟は自然法則からの逸脱だが、我々は日常生活で自然法則に従う現象ばかりを経験しているため、奇蹟の存在は疑わしく思われる。一方、奇蹟には誰かの証言がつきものだが、我々は信頼できる人物の証言が正しいことも経験的に知っている。そのため、奇蹟が正し

いのか、それとも証言が間違っているのかを判断しなければならない。そこでヒュームは、証言が間違っている可能性の方が、奇蹟よりも一層「奇蹟的」でない限り、奇蹟を信じるべきではないと結論づけた(Hume[1748→1882:93-94=2004:101-103])。こうした議論を、ヒュームは「蓋然性」という概念のもとで展開したのである。

心霊現象はここでいう「奇蹟」に当たるため、心霊研究の批判者はこの論法を用いることで、証言を拒絶することができる。これに対し、ウォレスは『奇蹟と近代心霊主義』において、ヒュームの議論に触れながら、奇蹟(自然法則からの逸脱に見える現象)は決して珍しくないと言論することで、ヒュームの議論を無効化しようとしている(Wallace[1874→1896:6-7])。一方、シジウィックは1889年に行った「心霊研究における証拠の原則」という報告において、奇蹟が正しいことの「ありそうもなさ」と、証言が間違っていることの「ありそうもなさ」の比較というヒュームの論点に触れながら、心霊研究の抱える問題点を次のように分析する。「いま、これらの対立するありそうもなさ(improbabilities)は非常に異なっており、我々はそれらを突き合わせて正確に比較検討できるような知的尺度を持ち合わせていない」(Sidgwick[1890:3])。

19世紀後半におけるこれらの議論の存在は、心霊研究における「裁判のレトリック」が「蓋然性」の問題系に属していたことを示している。心霊研究は、証言が間違っている可能性を小さくすることで、奇蹟が本物だと立証しようとした。ところが、シジウィックが気づいていたように、そこには「知的尺度」(＝定量的手法)が存在せず、「蓋然性」をうまく比較することができない。これに対し、1930年代には主流の位置を獲得した確率論・統計学は、心霊現象という「奇蹟」の問題を、「蓋然性」ではなく

「確率」の問題に変換する。もちろん、確率論・統計学を使用することで、超常現象の疑わしさが拭い去ることができたわけではないが、少なくともそれは「裁判のレトリック」を支える「蓋然性」という概念それ自体を時代遅れにするものだったと言えるだろう。

V. 結論

心霊現象研究協会の会長となった哲学者アンリ・ベルクソン（仏: 1859-1941）は、1913年に行った会長講演「〈生きている人のまぼろし〉と〈心霊研究〉」において、心霊研究の方法を論じている。ベルクソンは、テレパシーの研究が主に史料調査とインタビュー調査に依拠していることに触れ、それらが「歴史家の方法と予審判事の方法の中間にある」ものだと指摘した上で、続けて次のように述べる。

「それはピタゴラスの定理の証明が与えるような数学的确实性ではありません。ガリレイの法則の検証がもたらすような物理学的な确实性¹⁰⁰でもないでしょう。しかしそれは少なくとも、歴史や裁判の場合に得られるような确实性と同じものです。しかし、まさにそのことが大勢の人々を不快にします。……自然科学で使われる観察や実験の方法に拠るべきであると思われる諸事実が、歴史や裁判におけるように扱われるのはおかしいと思うのです」(Bergson[1919→1959:864-865=2012:102-104]、傍点・脚注は引用者による)。

ベルクソンはここで、科学（＝数学・物理学）と非科学（＝歴史・裁判）の間に分割線を引き、「裁判のレトリック」を非科学の側に割り振っている。「裁判のレトリック」と「科学的方法」は異質なものだというこの認識は、現代人にとっても馴染み深いものだろう。しかし、本稿が示してきたように、少なくとも19世紀末の段階では、このことは必ずしも自明ではなかった。もちろん、「裁判のレトリック」を積極

的に持ち出したのは、あくまでも心霊研究のような周縁的な領域の研究者に限られると予想されるが、それでも、当時の科学者にとって、それは単なる「レトリック」ではなく、むしろ「何が証拠たりうるのか？」という問題を考えるための方法論的なトポスの一つだったのだと考えられる。

翻って、今日の科学を特徴づけるのは「再現可能性」だろう。「再現可能性」とは「同じ条件下では、誰がやっても同じ結果になる」という性質のことである。現在ではこれが科学の本質だと見なされているため、「再現可能性」のない実験は、間違いか不正が疑われる。だが、本稿の見てきた「裁判のレトリック」には、明らかにこれとは異質な発想が含まれている。というのも、「裁判のレトリック」は、実験者による信頼性の違いを積極的に問題化するためである。だとするならば、「再現可能性」の浮上と「裁判のレトリック」の衰退は、コインの表裏の関係にある。

このことを考える上で、見逃すことができないのは、実験教育の転換である。科学史家のロレーン・ダストンとピーター・ギャリソンによると、1880年頃～1914年頃にかけて、特にドイツ・フランス・イギリス・アメリカにおいて、実験教育が集団化・標準化したという。すなわち、個人が勝手に実験を習得するのではなく、多数の学生が同じ訓練を受けるようになったのである (Daston and Galison[2007:325-327])。

誰もが同じ訓練を受けているならば、実験者ごとの属性の違いは意識されなくなる。すると、誰がやっても同じ結果が得られるという「再現可能性」の前提が信憑性を帯びるだろう。逆に、実験者の属性を問題にする「裁判のレトリック」は必要性を失う。ここでは詳細な検討はできないが、一般的な実験科学は、おおよそそのような形で「裁判のレトリック」と手を切ったのだと考えられる。これに対し、心霊研究は、

あくまでも見世物の延長線上にあり、実験を標準化することができなかつた。だからこそ、「裁判のレトリック」が使用されたわけだが、本稿が確認した通り、その心霊研究においてさえ、「裁判のレトリック」は失効していったのである。

一見すると、「裁判のレトリック」の歴史は、「再現可能性」を重視する今日の科学とは無縁なものに見えるかもしれない。しかし、そのように考えられるのは、実験報告の信頼性が自明視されているからにすぎない。例えば、1970年代以降の実験科学では、データの捏造や改竄といった研究不正が切実な問題として浮上してきたが、そうした事態は、他人による実験報告が、実は信頼性の問題を抱えていることを可視化さ

せる。そのとき、我々は信頼性をめぐる何らかの評価基準を採用しなければならなくなるが、そうした問題への対処を考えようとするれば、「裁判のレトリック」も奇妙なものだとは言えなくなる。

無論、こうした問題に対し、19世紀後半の心霊研究のように「裁判のレトリック」を用いなければならないわけではない。しかし、もしもそれを採用しないのだとすれば、少なくとも、この問題に対処するための新しいテクノロジーを用意する必要がある。実験報告への不信に晒され続けた心霊研究という領域は、現在の科学が本当は抱えているけれども、普段は不可視化されているような一連の問題を、拡大鏡のような形で示していると言えるだろう。

註

1. 従来の研究として、ここで念頭に置いているのは、Shapin and Schaffer[1985→2011=2016]、Sargent[1989]、Licoppe[1994]、Shapiro[1994]、Biagioli[1996]といった科学史周辺の研究である。
2. R・G・A・ドルビーは「科学」と「疑似科学」の境界設定の難しさを認識した上で、代わりに、正統的な科学者によって公認されている「正統科学」と公認されていない「逸脱科学」の区別を導入する(Dolby[1979=1986:306-311])。この二分法は有用ではあるが、「逸脱」の程度をうまく扱うことができない。「逸脱科学」にも、正統的な科学者によって全く無視されるものと無視されないものがあり、本稿はむしろその差異に着目する。
3. 心霊研究史の総説にはSommer[2014]がある。近代心霊主義の通史としてはOppenheim[1985=1992]やBlum[2006=2007]が包括的だが、新しい通史としてLuckhurst[2002]やMcCorristine[2010]がある。これらは、科学論・視覚文化論・メディア論などを踏まえ、方法論的自覚を持つ点で新しい動向だと言える。なお、日本では、一柳[1994]、橋本[2010]、浜野[2015]のような文学・表象文化論方面での研究が目立つ。
4. Oxford English Dictionaryではpseudoscienceの意味が二つに分けられている。(1) 科学的に正しいか、または科学的方法に基づくと思われる学問分野や信念体系、(2) 科学的だと主張されているが、そのようには受け入れられていない研究。(1)の初出は1796年、(2)は1831年とされている(OED Online)。
5. 心霊研究の中心はイギリスであり、そこにヴィクトリア朝の文化の影響があることは従来から指摘されてきた。文化史的な関心からすれば、各国文化との関わりが重要な主題となりうる。しかし、本稿のように科学的手続きの歴史を扱う場合には、むしろ国際的な議論の応答に注目する必要がある。
6. ただし、1874年以降のクルックスの実験はその信頼性が強く疑われているため、ここでは最初期の実験を題材としている。
7. ここにはやや複雑な事情がある。記事の冒頭においてハギンズとコックスはDr. A. B.とMr. C. D.という匿

- 名で言及されていたが、出版前に名前を出す許可が出たため、記事の末尾では名前が明らかにされている。
8. 心霊研究の文脈において「誠実」という言葉には、単に「嘘をつかない」ということだけでなく、「自分の発言に責任を持っているがゆえに疑いをかけるべきではない」というニュアンスも含まれているように見受けられる。
 9. Franklin[2001=2018:572]は、蓋然性の歴史に「非定量的蓋然性」から「定量的蓋然性」へという趨勢を見出している。しかし、本稿は「定量／非定量」の未分化状態から分化状態への変化だと捉えている。
 10. 「確実性」の原語はcertitudeだが、ベルクソンは方法ごとに「確実性」の度合いが異なると考えている。その意味で、「確実性」は「蓋然性」とかなり近い意味で使われている。例えば、別の箇所には「すなわちそれ [=物質科学の発達によって得られたもの] は正確さ、厳密さ、証明への配慮、単に可能か蓋然的なものと確実なものとの区別する習慣です」(Bergson[1919→1959:877=2012:124-125]、[] 括弧内は引用者による)とある。「確実性」には、「確実certain」から「可能possible」や「蓋然的probable」までの幅があり、物質科学は「確実」か否かに敏感だというのである。Shapiro[1983:chapter II]によれば、西欧において「確実性」と「蓋然性」とが程度問題だと捉えられるようになったのは17世紀以降のことだが、中にはアイザック・ニュートン(英1642-1727)のように「確実性」を再び「蓋然性」から切り離す論者もいた。ベルクソンの主張には、そうした歴史的背景がある。

文献

- Bergson, Henri (1919→1959) “《Fantômes de Vivants》 et 《Recherche Psychique》,” in *L'Énergie Spirituelle*, in *Œuvres*, Paris: Universitaires de France, 811-977. =(2012) 原章二(訳)「〈生きている人のまぼろし〉と〈心霊研究〉」『精神のエネルギー』平凡社, 97-129.
- Biagioli, Mario (1996) “Etiquette, Interdependence, and Sociability in Seventeenth-Century Science,” *Critical Inquiry*, 22(2):193-238.
- Blum, Deborah (2006) *Ghost Hunters: William James and the Search for Scientific Proof of Life After Death*, New York: Penguin Press. =(2007) 鈴木恵(訳)『幽霊を捕まえようとした科学者たち』文藝春秋.
- Carpenter, William B. (1871) “Spiritualism and its Recent Converts,” *The Quarterly Review*, 1871(October):301-353.
- Crookes, William (1870) “Spiritualism Viewed by the Light of Modern Science,” *Quarterly Journal of Science*, 7(27):316-321.
- (1871a) “Experimental Investigation of a New Force,” *Quarterly Journal of Science*, 8(31):339-349.
- (1871b) “Some Further Experiments on Psychic Force,” *Quarterly Journal of Science*, 8(32):471-493.
- Cunningham, Andrew and Perry Williams (1993) “De-Centering the ‘Big Picture’: The Origins of Modern Science and the Modern Origins of Science,” *BJHS*, 26:407-432.
- Darnton, Robert (1968) *Mesmerism and the End of the Enlightenment in France*, Cambridge, MA: Harvard University Press. =(1987) 稲生永(訳)『パリのメスマー：大革命と動物磁気催眠術』平凡社.
- Daston, Lorraine and Peter Galison (2007) *Objectivity*, New York: Zone Books.
- Dolby, R. G. A. (1979) “Reflections on Deviant Science,” in Roy Wallis (ed.), *On the Margins of Science: the Social Construction of Rejected Knowledge*, Staffordshire: University of Keele, 9-47. =(1986) 杉山滋郎

- (訳)「逸脱科学に関する考察」高田紀代志ら(訳)『排除される知：社会的に認知されない科学』青土社、306-374.
- Franklin, James (2001) *The Science of Conjecture: Evidence and Probability before Pascal*, Baltimore: John Hopkins University Press. =(2018) 南條郁子(訳)『〈蓋然性〉の探究：古代の推論術から確率論の誕生まで』みすず書房.
- Hacking, Ian (1975→2006) *The Emergence of Probability, second edition*, Cambridge, UK: Cambridge University Press. =(2013) 広田すみれ・森元良太(訳)『確率の出現』慶應義塾大学出版会.
- (1988) “Telepathy: Origins of Randomization in Experimental Design,” *Isis*, 79(3):427-451.
- 浜野志保 (2015)『写真のボーダーランド：X線・心霊写真・念写』青弓社.
- 橋本一徑 (2010)『指紋論：心霊主義から生体認証まで』青土社.
- Hodgson, Richard and S. J. Davey (1887) “The Possibilities of Mal-Observation and Lapse of Memory from a Practical Point of View,” *Proceedings of the Society for Psychical Research*, 4:381-495.
- Hume, David (1748→1882) *An Enquiry Concerning Human Understanding*, in Thomas Hill Green and Thomas Hodge Grose (eds.), *David Hume: The philosophical works vol.3*, Aalen: Scientia Verlag. =(2004) 斎藤繁雄・一ノ瀬正樹(訳)『人間知性研究』法政大学出版局.
- 一柳廣孝 (1994)『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉：日本近代と心霊学』講談社.
- James, William (1897→1960) “What Psychical Research Has Accomplished,” in Gardner Harphy and Robert O. Ballou (eds.), *William James on Psychical Research*, New York: The Viking Press, 25-47.
- Jastrow, Joseph (1901→1925) “Memory (defects of),” James Mark Baldwin (ed.), *Dictionary of Philosophy and Psychology vol. 2*, 64-66.
- Knight, David (2009) *The Making of Modern Science: Science, Technology, Medicine and Modernity 1789-1914*, Cambridge, UK: Polity Press.
- Le Bon, Gustave (1895) *Psychologie des Foules*, Paris: Felix Alcan. =(1952→1993) 櫻井成夫(訳)『群衆心理』講談社。(底本は1921年29版及び1931年38版)
- Licoppe, Christian (1994) “The Crystallization of a New Narrative Form in Experimental Reports (1660-1690): The Experimental Evidence as a Transaction between Philosophical Knowledge and Aristocratic Power,” *Science in Context*, 7(2):205-244.
- Luckhurst, Roger (2002) *The Invention of Telepathy: 1870-1901*, Oxford: Oxford University Press.
- Massey, Charles C. (1887) “The Possibilities of Mal-Observation in Relation to Evidence for the Phenomena of Spiritualism,” *Proceedings of the Society for Psychical Research*, 4:75-99.
- McCorristine, Shane (2010) *Spectres of the Self: Thinking about Ghosts and Ghost-Seeing in England, 1750-1920*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 三浦清宏 (2008)『近代スピリチュアリズムの歴史：心霊研究から超心理学へ』講談社.
- Oppenheim, Janet (1985) *The Other world: Spiritualism and Psychical Research in England, 1850-1914*, Cambridge, UK: Cambridge University Press. =(1992) 和田芳久(訳)『英国心霊主義の抬頭：ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』工作舎.
- Palfreman, Jon (1979) “Between Scepticism and Credulity: A Study of Victorian Scientific Attitudes to Modern Spiritualism,” in Roy Wallis (ed.), *On the Margins of Science: The Social Construction of Rejected*

- Knowledge*, Staffordshire: University of Keele, 201-236.
- “pseudoscience,” in *OED Online*, Oxford University Press. <http://www.oed.com/view/Entry/153794?redirectedFrom=pseudoscience>. 2018年11月17日DL.
- Sargent, Rose-Mary (1989) “Scientific Experiment and Legal Expertise: the Way of Experience in Seventeenth-Century England,” *Studies in History and Philosophy of Science*, 20(1):19-45.
- Schaffer, Simon (1992) “Self Evidence,” *Critical Inquiry*, 18(2):327-362.
- Shapin, Steven (1996) *The Scientific Revolution*, Chicago: The University of Chicago Press. =(1998) 川田勝(訳) 『「科学革命」とは何だったのか：新しい歴史観の試み』白水社.
- Shapin, Steven and Simon Schaffer (1985→2011) *Leviathan and the Air-Pump: Hobbes, Boyle, and the Experimental Life, second edition*, Princeton: Princeton University Press. =(2016) 吉本秀之(監訳)・柴田和宏・坂本邦暢(訳) 『リヴァイアサンと空気ポンプ：ホッブズ、ボイル、実験的生活』名古屋大学出版会.
- Shapiro, Barbara (1983) *Probability and Certainty in Seventeen-Century England*, Princeton: Princeton University Press.
- (1994) “The Concept ‘Fact’: Legal Origins and Cultural Diffusion,” *Albion*, 26(2):227-252.
- 篠木涼 (2016) 「アメリカ初期裁判心理学におけるミュンスターバーグとウイグモアの論争：大衆への訴えかけと専門家との関係から」『立命館人間科学研究』33:15-27.
- Sidgwick, Henry (1884) “President’s Address,” *Proceedings of the Society for Psychical Research*, 2:152-156.
- (1890) “The Canons of Evidence in Psychical Research,” *Proceedings of the Society for Psychical Research*, 6:1-6.
- Sommer, Andreas (2014) “Psychical Research in the History and Philosophy of Science: An Introduction and Review,” *Studies in History and Philosophy of Science Part C: Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Sciences*, 48:38-45.
- Stafford, Barbara Maria (1994) *Artful Science: Enlightenment Entertainment and the Eclipse of Visual Education*, Cambridge, MA: The MIT Press. =(1997) 高山宏(訳) 『アートフル・サイエンス：啓蒙時代の娯楽と凋落する視覚教育』産業図書.
- Wallace, Alfred Russel (1874→1896) *Miracles and Modern Spiritualism, third edition*, London: G. Redway.
- (1877) “Notices of Books: Mesmerism, Spiritualism, &c., Historically and Scientifically Considered. Being Two Lectures Delivered at the London Institution, with Preface and Appendix. By William B. Carpenter, C.B., M.D., F.R.S., &c., &c. London: Longmans, Green, and Co., 1877,” *Quarterly Journal of Science*, 14:391-416.